モンゴル人のゲルの構造

井　本　英　一

モンゴル人の伝統的住居であるゲル（中国語ではパオ（包）という）についての３つの特徴を解説する。１はゲルの頂上に開けられた円い天窓，２は円い窓枠を支えるために枠と地上の間に立てられた柱，３は天窓の中心から地上に垂らされた紐についてである。

ゲルの天井には，ゲルの大きさによって１メートルから２メートルに及ぶ㊥型の木枠が設けてある。外側の枠には78個の四角い穴があり，その穴に78本の彩色された棒が差し込まれ円錐形の屋根をつくる。棒の下端は，円形の垂直壁の上部を巡る木枠の穴に挿入される。壁は，幅４センチ，厚さ１センチほどの材木を斜めに組み合わせた矢来からできている。矢来は高さが１メートル60センチぐらいあり，地上の円い木枠に固定される。モンゴル国西部の部族のゲルでは，天井の棒は直線ではなく，洋傘の骨のように湾曲している。そこでゲルの天井は和傘を開いたときの形と洋傘を開いたときの形の２つがある。矢来の壁は骨骼部分で，室内には何板かの飾り板が立てられる。出入口は東寄りの南向きに設けられる。扉はタテ1.2メートル，ヨコ80センチほどの片開きの開き戸で，外側はことに美しく彩色されている。出入り口は背を屈めて出入りする。天井の天窓の真下にストーブがあり，鉄板製の煙突が天窓から外に出ている。夏でも寒い夜は薪を焚く。昔はこの場所に炉が設けてあった。壁に沿ってベッドが４つほどあり，家族の人数が増えるとゲル自

体を大きくしてベッドの数を増やす。30人が入る会議場や食堂もゲルの中に設置できる。ゲルの外側はフェルトで覆い，綱であちこち縛ってあり，大きな石を重しにしてゲルを全体を強風から守る。円い天窓の半分は布やフェルトで覆ってある。夜も半分開けたまま寝る。雨，雪が降るときは外に出てゲルに上り，天窓に布を掛けて雨が入らないようにする。遊牧あるいは放牧のために移動する場合，ゲルは分解して駱駝の背に積んで運ぶ。2時間あればゲル1個が設営できる。羊の解体はゲルの外で行い，肉の煮炊きはかなり離れた場所でする。便所も各ゲルに付設されておらず，離れた場所にまとめて設けられる。汚水は地下に流し込む。

モンゴル人のゲルの天窓は明かり取りになり煙出しになる。真夏でも外の灼熱の暑さからゲルの中に入ると蔭の涼しさを感じる。入り口の戸を開けたままにしておくと風通しがよい。円い壁を覆った布を10センチほど捲り上げておくと，夜は地上を吹く風が入ってきてゲルの中はかなり冷える。矢来の隙間から地下の穴に住む何千，何万という小さい野鼠が何匹も入ってきて机の上の残り物を漁る。蟻も無数にゲルの中に入ってくる。就寝するときは，雨が降らない限り，半分開けたままの天窓はそのままにしておく。円い天窓は大小2つの円型の枠を十字型の輻で固定し，さらにその間に4本の輻を放射する形式になっている。つまり，八角表象をとっている。枠は円形であるが円の内側の8本の輻がこれを表わしている。円の中に8本の輻がある自転車の車輪のような文様は古代メソポタミア文明や仏教の法輪で普通に見られるものであり，円い枠のない8本の輻はシュメル語では天や神を表示する記号である。モンゴルのゲルの八角表象をもった天窓は天そのものを表わすのである。このような宗教的象徴は他の文化にも見られるので以下に論じてみよう。

古代イランの国教であったゾロアスター教は拝火教の別名で広く知られている。主神アフラ・マズダーを天神として崇拝するので，中国では祆教と呼ばれた。ゾロアスター教徒は正八角形の祭壇の上でザクロの木の薪を焚き，油を注いでその煙を天に送り天神を供養する。祭壇の周囲には八方に八角形

の石柱が立てられ，それぞれの石柱の頂上は石梁でつながれる。祭壇が石の祭殿に設置されている場合，天井であるドームの中央には大きい八角形の穴が開いている。この穴を通じて火に投じた供物が煙になって天に昇るのである。ゾロアスター教の拝火神殿には祭壇，柱，空間，ドーム天井の穴などに八角表象が見られる。ゾロアスター教徒は，イランのヤズドにいる者やインドのボンベイ（ムンバイ）に移住した者は，正月に火を改める習慣をもっている。彼らは新年である春分の日の前夜（われわれの12月の大晦日の日没から新年に当たる），ゾロアスター教の祭殿に詣り，八角祭壇に燃える火をもらって帰り，１年間家の火として大切に保存する。火は玄関の火炉に毎朝埋められ，指先で香を振りかける。

家の火は古い文化なら世界中に見られる。日本の古い様式を伝えた家では，玄関の上がり框のある縁の真中に火鉢が置かれ，毎朝その中に新しい炭を埋め足す。嫁入りや出棺のときに焚く火や盆の迎え火は，古くは入り口で火が焚かれた名残りであると考えられる。新年に商家の入り口の土間（庭といった）で使用人が庭かまどの飯を炊いたことが西鶴の『世間胸算用』に見られるが，これも炉やかまどが入り口にあったことを物語っている。京都の八坂神社で毎年行われる祇園白朮（おけら）祭では，大晦日から元旦にかけて神社の前で焚かれた白朮の入った焚き火から吉兆縄に火を移し，消さないように縄を振り回わしながら家にもって帰り雑煮を煮た。白朮火の火種は12月28日に鑽り出し，社前の六角形の灯籠に点ずる。八坂神社の社前で焚く白朮火の火種は六角表象と関係がある。

イランの古都イスファハンは，アッバース大帝（在位1581－1629）によって当時の人びとに世界の半分といわれたほど華麗な首都に仕立てられた。イスファハンの中心にあるメイダーネ・シャー（王の広場）に面するマスジェデ・シャー（王のモスク，現在はマスジェデ・イマームと改称）のドームの頂上には穴が空いていない。人がドームの真下に立って強く足を踏み鳴らすと堂内に数回反響する。手を強く拍っても同じような反響がある。王のモスクは外側も内側も美しい青いタイルで覆われているが，それより古いマスジェ

デ・ジョムエ（金曜日のモスク）は化粧レンガを一切使わない焼成レンガだけでできたモスクである。このモスクのドームのてっぺんには六角形の穴が開いている。モンゴルのゲルの天窓の穴は八角表象（円形）をとっているが，こちらは六角表象をとる。ゾロアスター教の拝火殿のドームの穴は八角表象であるが，初期のイスラムのモスクは何らかの影響を受けたと考えられる。

モスクのドームの頂上には穴がなくなるが別の場所に四角い穴が開いている。モスクの四角い壁の上に半球形のドームが乗っているのであるが，その接触面でメッカの方向に当たる場所に１メートル×80センチほどの四角い穴が開いている。穴から覗くと，ドームの真下の広い礼拝場が見える。この四角い穴の真下にミフラーブがある。ミフラーブは，設計の段階で聖地メッカに壁を向け，その中央に設けられたアーチをもった壁龕で，門形式であるので左右に八角形の柱が壁にはめ込まれた形になっている。ミフラーブの床面は礼拝場の床よりは低い。ミフラーブの右側にミンバルという説教壇がある。ミンバルは古くは木製の17段の階段で，最上段には預言者マホメットが座る玉座があり，タブーの場である。金曜日の集団礼拝では，導師は階段の２段目に座って説教する。ミンバルは天と地を結ぶ梯子で，マホメットの座はより古くは天上の神の家であった。導師（イマーム）は発生的には天の声を伝えるマホメットや天使がより古い形と考えられる。礼拝者は金曜ごとに，メッカの方に向かったアーチ型の門を拝み，自分の魂をミンバルを伝って天上に昇らせ神に触れ，また下降させて，魂のよみがえりを行ったのであった。ミフラーブの真上にある四角い穴は天上に開けられた穴で，ミンバルの階段を介して地上と通じるようになっていた。ミンバルは『旧約聖書』「創世記」の中で，ヤコブが夢の中で見た天と地をつなぐ梯子と同じものと考えられる。日本では，３本の巨木を縛って合成した48メートルの高さの何本かの柱の上に建てられた古代の出雲大社と神殿に上る階段の中にそれを見ることができる。

奈良東大寺の大仏殿は南面しているが，破風の下に両開きの扉のついた窓があり，祭りのときは扉が開く。夜は中門の所から堂内の灯火に照らされた

大仏の顔の部分が拝める仕組みになっている。イスラムのモスクの場合，会堂の中から穴を通してメッカにある神の家を拝むのであるが，仏教の大仏殿の場合は，人々は外から堂内（仏国土）の仏を拝むのである。梯子の存在はつまびらかでないが，梁や桁がその役割を果たしているのであろう。京都宇治市の平等院鳳凰堂の阿弥陀仏の顔は，池を距てて破風の窓から拝むことができる。この場合も人々は外から仏国土の阿弥陀を拝むので，モスクの構造とは逆になっている。

大仏殿や鳳凰堂には，大仏と阿弥陀が祭ってあり，破風の穴を通して外からその顔を拝むことができる。これらの仏堂は神仏の家であり，四角い窓を通して俗界と通じている。イスラムの聖所であるカアバ神殿は似たような構造をもつ。メッカには現在高さ13メートルの石造のカアバがあるが，初期のカアバは人の背丈と同じ高さで，屋根が付いてなかった。度重なる洪水で破壊されたため，現在のような重厚なものになったという。現在のカアバ神殿は10メートル×12メートル×13メートルの立方体の石造物で，入り口を閉めると内部は真暗になる。床面は地上２メートルの所にあり，３本の柱が屋根を支える。カアバに入るには，入り口の所に車輪付きの階段（タラップ）をもってこなければならない。床から屋根（天井）に向かって11メートルの梯子が立て掛けてあり，上げ蓋を上げて屋根の上に出ることができる。祭りの期間中は四角い上げ蓋は開けたままになっている。３本の柱はアラビア語でもペルシア語でもへその緒と呼ばれる。２本が動脈，１本が静脈を表わす。２メートル余りの高さの床は地上に出た大地のへそと考えられている。床の中央にある深さ60センチほどの穴はへその穴で，マホメットによってイスラムの聖所とされる以前は，穴の中にエメラルドと金でできたフバルという神の偶像があった。外壁の１つの地上1.5メートルの所に黒い隕石がはめ込んであり巡礼者はそれにキスする。黒石は母胎から出る直前の新生児の頭を表わす。カアバ神殿は異教時代の神殿であるが，他の神殿がもっている宗教的象徴を全て備えている。メッカのカアバ神殿と同じものが，紀元前６世紀のペルシア帝国のパサルガダエ宮殿とナクシェ・ロスタムに残っている。保存

状態のよいナクシェ・ロスタムのカアバは天井に穴は開いてないが，四壁に化粧窓（めくら窓）がついている。この窓は単なる文様であるので開くことはない。ペルシア帝国のカアバには前身があったはずで，その前身には開閉できる扉のついた窓が付いていたと考えられる。

建築物は一種の小宇宙であるので，宇宙としての秩序のもとに設計され運営されたのである。天井に開けられた穴や壁に開けられた穴は宇宙論的に見るべきもので，実用的な用途はのちになって考え出されたものである。穴は天と通じる穴であった。穴が塞がった状態では祭りは行われなかった。イスラムでは重要な祭りの１部は屋根やドームの下では行われないで，青空の下の庭でカーペットを敷いて行われた。カーペットを敷くのは，祭りの体裁を整えるためではなく，祭りを主宰する者の足が直接土に接触して彼がもつ神的エネルギーが地中に吸い取られないようにするためであった。祭りの最中，天から降りてくる神の子（稚子）は祭祀者に抱かれたり肩車に載せられて，その足が地に着かないよう注意が払われた。伊勢神宮の祭りもそうであるが屋根のない庭つまり神庭で行われるものがあるのはこの原理に依っている。茶室の古い形式で天井を張らないのは，質素を旨とするという考え方以前に天と地が通じ合うという考え方があったのではないかと思う。屋外で行う野点（のだて）は敷き物を敷き大地との接触を避けるのは理解できるが，傘を立てて天を遮るのはどういうことなのか。『礼記』郊特牲に次のようにいう。天子が祭る国土神の社は必ず霜露風雨にさらされなければならない。こうすることによって天子は天地の気に達することができる。そこで喪国の社は屋根をかけて日光が当たらぬようになっている，と。

ゾロアスター教徒は葬儀において家から死体を出すとき，出入り口からは出さないで，死体を安置した部屋の壁を破って死体を搬出し，ただちに泥で穴を塗りつぶす。死体を鳥葬の場である沈黙の塔に運んでいったとき，50～60センチはある厚い壁を破り（その場所は決まっている）死体を搬入する。壁の穴はこの世とあの世の間の出入り口である。マルコ・ポーロは，チベット系の部族である西夏族は，死体を玄関からではなく壁を破って出すように

しばしば占星師に指示されると述べている（『東方見聞録』１，愛宕松男訳注，東洋文庫，1970年，123頁）。日本では死体を安置した西北の部屋の床の間の掛け軸を外しそこの壁を破って外に出す。死体を出したあと，ただちに木舞（こまい）を組んで泥壁を塗り穴を塞ぐ。家屋が小宇宙を表象するというのは前述した通りであるが，それはコスモスとしての秩序を表象するものであった。

ローマのヴァティカン市にあるサン・ピエトロ寺院のドームの頂上には大きな円い穴が開いていて天空と通じている。穴の真下から数メートル離れた場所に高さ50センチほどの黒石が安置してある。参詣者が石に接吻するのでつるつるになっている。天井の穴と黒石の組み合わせはカアバ神殿の天井の四角い穴と外壁にはめ込まれ，参詣者にキスされてつるつるになった黒石と同じである。天井の穴の真下，さらに古くは入口に設けられた炉に立てた２つの石――男根石と女陰石――，あるいは陰陽石と関係があると思う。さらに古代の香炉の中に入れた２つの石とも関係があるであろう。天と通ずる穴の下に１つあるいは２つの石を置く習慣が東西に見られる。石は隕石の場合があるので一層この感を深めさせる。穴の下に炉があり炉の中に立てた陰陽の石の場合，火が雷として地上に落下したことを表わす。いずれの場合も石はへそ石と呼ばれるものである。へそ石は地上に出べそとして突出し，中央に穴が開いた形式をとるものが多く，カアバ神殿の地上２メートルの床はこの構造をとるが，さらに黒石はやや離れた所にある。サンピエトロ寺院には床面には穴はないようである。東大寺大仏殿の入り口の右側に賓頭盧（びんずる）尊者像が安置してある。この大きな座像は堂の軒下で風雨に曝されるままになっており，覆い屋に類するものはない。大仏参詣人は尊者のつるつるの禿頭を撫でる。この座像は江戸時代のもので，発生的には破風にある窓の下に置かれたへそ石であった。大きなつるつるの丸石を撫でたり，小さい石を当てて火花を出したと考えられる。お水取りのとき，和上は尊者像に詣り，２つの石の前で火を焚き自誓受戒する。

日本では死者を埋葬して土饅頭をつくったとき，太い竹の節を抜いて差し込み，外部と土中の連絡孔とする。死者が息を吹き返したときの空気の供給

装置となり，赤子を生んだときは産声が外に聞こえる。出産して死んだ母親は幽霊となってこの孔を通り，例えば京都六波羅の六道の辻の飴屋に赤ん坊にしゃぶらせる飴を買いにくる。土葬のさい，死体の頭の辺りに拳大の石を添えた。石と筒との組み合わせは再生のための装置であった。いっぽう，塚の上から死者に糞尿をかけ，死者の再生を促す行為もあった（井本英一『穢れと聖性』法政大学出版局，2002年）。

チンギス・カンの出生とゲルの天窓とは関係がある。『モンゴル秘史』（1，村上正二訳注，東洋文庫，1970年）によると，その冒頭に次のような伝承が記されている。上天の定めによって蒼い狼が生まれ出た。その妻は白い牝鹿で大湖を渡ってきた。2匹はオナン川の水源であるブルカン岳に住んでバクチカンという子を生んだ（5頁，巻1の1）。本書の訳注やドーソン『モンゴル帝国史』（1，佐口透訳注，東洋文庫，1968年）の訳注によると中央アジアの諸部族には狼を始祖とするものがいくつかある。これらの注釈を読んでも，狼がなぜ始祖になったかの説明に出くわさない。以前に述べたことであるが，太古，野たれ死にした人体を最初に食べるのは肉食鳥と狼，野犬の類いであった。鳥や狼には人間の霊魂が宿ると考えられた。羽衣説話の鳥や狼が始祖と考えられるようになった理由である。人間の霊魂の最初の宿主は鳥や狼のように死体を食べる野生の鳥獣であるが，これらの鳥獣が死んで転生し別の動物になるとき，これらの動物は必ずしも肉食でなくてもよかった。『モンゴル秘史』に出る蒼い（注によると灰青色の意）狼は祖先獣（トーテム）である。白い（黄味がかった白色の意）鹿は妻のトーテムであった。

別の伝承（巻1の17－21）はこうである。アラン・コアは夫ドブン・メルゲンとの間に2人の子供を儲けた。彼女は夫が亡くなったあと3人の子供を生んだ。3人の子供の名前には，牡鹿，牡牛，牡馬を表わす名がついていた。この3人はモンゴル三大氏族の祖となった。母のアラン・コアのいうところによると，夜ごとに光る黄色い人が天窓づたいに入ってきて，その光がお腹の中にしみ通っていった。出てゆくときは，天窓から差し込んでくる日月の光線に沿って，黄色い犬のようにはい出ていった（28－29頁と注）。

祖先神と人間の女との聖婚によって生まれた神の子が始祖となった。天神はゲルの天窓から入ってきて人間の女の胎内に入る。天神は蒼い狼であったり黄色い犬であったりする。伝承では最初は黄色い人間で，出てゆくときは黄色い犬の形をとる。祖先神が人間の姿で降下してくるのは，祖先獣が降下する形よりは進化した形である。黄色は神聖な皇帝の色とされたのであろう。東西南北と中心は青白赤黒と黄で表象されたので，黄色は宇宙の中心の色と考えられた。中国皇帝の袍に刺繍した五指の竜は金色ではなく黄色の糸が使われた。黄色は一方では枯死の色として忌まれたが，本来は大地の色として貴ばれたのが価値転移を起こしたのかも知れない。このような黄色の表象をもったものが始祖の誕生説話に用いられている。チンギス・カン誕生の第1の伝承に見られる蒼い狼と白い鹿の場合，白は黄味を帯びた白色の意とされるが，蒼はうすあお色とされる。蒼はうすねずみ色でもない。蒼は倉に収納された麦の穂や茎の色，つまり黄金色の意味をもつ。蒼い狼と白い鹿は黄色い狼と黄色い鹿のことである。より現実に近い形としては，黄と白のまだらの狼と黄と白のまだらの鹿のことである。

ゾロアスター教にはサグ・ディードということばがある。近代ペルシア語であるが，古代からの習俗で，時代時代のことばがあった。サグは犬の意でディードは凝視の意である。人の臨終の場に，黄と白のまだらの毛並で黄色の大きい眉のある犬を連れてくる。この種の犬は四つ目の犬といって昔から存在する。両眉と両目が四つ目に見えるから古来そう呼ばれてきた。この犬は臨終の人の傍で始めはじっとしているが，人が断末魔の苦痛の声を上げてこと切れると急にそわそわし始める。犬にとっては死者は肉の塊に見え始めるという。ゾロアスター教徒の野辺送りでもこの四つ目の犬が葬列の先頭をゆく。黄と白のまだらの四つ目の犬は，この世とあの世の中間にいる犬で2匹が合体して4つ目になったのである。ギリシア神話のケルベロス犬は，地獄の入り口の番犬であるが，この犬は胴と前肢後肢は1体分しかないが，首と頭は胴の左右に1頭ずつ付いている。美術に見られるケルベロス像では，両方の首の間から醜悪な人間の頭が覗いている。ケルベロス犬には色の指示

はないが，サンスクリットの対応語であるシャルヴァラスは四つ目の犬の属性である雑色の意であるので四つ目の犬の同類である。黄はこの世の皇帝の色で再生の象徴であり，白はあの世の色で死の象徴である。『モンゴル秘史』に見られるチンギス・カン誕生に際しての黄色の表象を比較分析してみた。

ゲルの天窓は二重の円い木枠で成っている。大小 2 つの木枠は十字に組んだ木で支えられ，さらに外枠の大円と内枠の小円の枠の間は十字の支え木の真中にくるように 4 本の木によって支えられている。 8 本の輻が全て二重円の中心に集合するのは，強度の点から見て必ずしも最良のやり方ではない。中心部は十字の方が強い。ゲルの円錐形あるいは地域によってはドーム形の屋根（天井）を支えるための柱が外側の円い木枠に差し込んである。柱は 2 本の場合と 4 本の場合がある。 4 本が上限である。柱はどれも八角柱で， 2 本の場合は東西の方向に立っている。従って入り口から入ると左右に柱が立ち，その間にストーブが設置してあり煙突が天窓から外に出ている。燃料は石油や石炭ではなく薪である。モンゴル高原では燃料にする薪は入手し難いので，毎日駱駝の背に積んで運んでくる薪は貴重品である。ストーブのある場所には古くは炉があった。柱が 4 本の場合，他の 2 本は南北軸上に立てられるほか東西軸上に立てられた 2 本の柱に近く立てられる。八角柱に手を触れてはならないと聞いていたが，モンゴル人を見ていると平気で触れていた。柱の間を通ってはならないと聞いていたが，柱の間，ストーブの傍を通ることもタブー視しないように見えた。ストーブの位置が炉であった時代は炉を跨ぐことは禁じられたであろう。日本の炉端で家人の占める場所，客人の占める場所があるように，モンゴルのストーブ（炉）の周囲にも伝統的な場所がある。

八角表象をもった柱が普通の柱とはちがい聖なる場所に用いられることはかつて論じたことがある。ゲルの天井を支えるとされる柱も同じである。この柱にはある程度のタブーが現在に至るまで残っているのは前述したとおりである。移動生活を主としていた時代のゲルは小型を旨としたので， 2 本柱あるいは 1 本柱が古い型であったことが分かる。 2 本柱の場合， 1 本は雄柱

と呼び他の１本は雌柱と呼ぶ。ゲルに用いられる柱は日本の家屋の大黒柱に相当する。大黒柱は，かまどが据えられた土間や囲炉裏（炉）を切った座敷の一角や田の字型の家屋ならその中心に立てられる。大きい家屋なら合計３本あるが，小型の家屋の場合，座敷の方は田の字の中心，土間の方はかまどの傍の２本で済む。日本の家屋は炉とかまどが分離しているので，２本の大黒柱も分離独立した観がある。家屋が大型になると更に１本，炉・かまどとは関係のない所に立てられるようになったと考えられる。囲炉裏やかまどの傍の大黒柱には，厨房の神であるえびす（夷）や大黒を祭ったり，かまどの傍の大黒柱にはひょっとこ（火男）の面を掛けたりする。日本の民話には，炉を切るときまず家の始祖あるいはそれに代わる者をその下に埋めるという話がある。火男の起源は家の始祖である。炉やかまどは古くは入り口にあり，入り口の敷居の下に幼少の家族を埋葬する習慣があったので，入り口の両側の柱は２本の大黒柱と同じものであったと考えられる。モンゴルのゲルの天窓の下に立つ２本の八角柱は男女の別があるが，古くは男女を埋めた上に柱を立てたからであろう。その場に炉を切り，そこを住居とするようになったのであろう。ゲルの場合，構造上入り口に炉を設け柱を立てることはできない。

天窓の円い枠と地上をつなぐ八角柱の頭部に羽型の飾りがついている。この羽型と全く同じものが韓国の村落の入り口に立ててあった天下大将軍と地下女将軍の２つの柱の顔の左右に付いている。この場合は羽というよりは巨大な耳か，耳の所で髪を丸めてみずらのようにしたものと見られる。この男女の柱にはこの形象以外，鳥の記憶はないが，これらの柱の同類である長生（チャンスン）には鳥そのものが柱の先端に止まっている。長生は天下大将軍柱と地下女将軍柱の横にそれぞれ立っている。文化によっては長生の間に横木を渡し，横木の上に何羽かの鳥を止まらせる。日本の鳥居の源流であるが，弥生時代の遺跡から長生の同類が出土するので，鳥居は弥生時代にも存在したと考えられる。長生と男女の将軍柱は別種のものではなく同種のものである。両方とも境界に立つ神像で，一方は祖先神として鳥そのものを柱に

止まらせ，他方は人像の頭部に鳥の羽を付ける。柱は祖先が宿るものなので，人像と同類である。結局，両方とも同じものなのである。

古代ギリシアでは，船を海岸に引き上げて半舷ずつそれぞれ２本の柱で船腹を支え修理や保管に供した。柱は海岸の砂地から覗いた岩や他所から運んできた岩の上に立てられた。砂から顔を出した岩や潮の満ち引きで顔を出したり隠れたりする岩礁はヘルマと呼ばれた。ヘルマは境界石であった。境界石ヘルマは神格化されヘルメスと呼ばれた。ヘルメスは境界神である。岩の上に立った柱は境界柱で境界石と一体となる。境界柱は水平的空間の境界に立つと認識される以外に天と地をつなぐ天柱と考えられた。ヘルメスは境界神であるので異なった地域を移動する使者の神格とされた。ヘルメスは顔を付けた四角い石柱で表わされた。石柱の下部に男根が付いていた。この石柱は家屋から道路に出る出口に１本あるいは左右２本立てた。ヘルメス像は朝鮮の天下大将軍像や地下女将軍像と同じものである。出入りするとき，人は石柱に手を触れた。出入りするとき門柱（石柱や木柱）に手を触れたり指を擦りつける風習はユダヤ人や先イスラム時代のアラブの間にもあったことはかつて論じたことがある。

もう１つのヘルメス神の象徴はラテン語でカドゥケウス（ギリシア語ではケリュケイオン）と呼ぶヘルメスの杖である。カドゥケウスということばは，ギリシア語ケリュケイオン（使者の権杖）のラテン語訛りである。カドゥケウスは長さ１メートルほどの棒で，２匹の蛇が左右対称に大きな弧をつくって巻きつき，棒の先端には左右に拡げた翼を付ける。蛇はＳ字がつくる曲線を描いて交差するので，どの交差の部分も円形をつくる。２つの円形は８の形を成す。その上に翼が拡がる。ヘルメス神は使者の神格であるので，美術ではサンダルに羽が付いている。カドゥケウスの羽と足の羽で速く目的地に着けるようにと解されるかも知れないが，本来は別の起源をもっていたと考えられる。ヘルメスは別名プシュコポンポスと呼ばれた。その意味は「霊魂の導き手」で，死者の魂をあの世に運ぶのを仕事としていた。この世とあの世の間を往来するので羽をつけていたのである。さらに分析すると，死者は

鳥に食べられ，魂が鳥の体中に入り鳥の姿になってあの世に飛翔したとも考えられる。この鳥と境界神ヘルメスが合体してプシュコポンポスが成立したのであろう。

カドゥケウスに交差して巻きつく蛇は，埋葬された死者の魂が，春になって塚を破り塚に立てられた柱に登り巻きついたものである。蛇は2匹であるのは雌と雄を表わしている。蛇も鳥も祖先の霊魂が化身したもので，祖先獣トーテムであり，ヘルメスの杖，棒，柱はトーテムポールである。北米のトーテムポールは一様に柱の頂上には翼を拡げたサンダーバード（雷鳥）が止まっている。この鳥は雷が鳴ると飛来するとされる。稲妻は祖霊が天空から地上に降りる姿であるとされるので，雷鳥はトーテムと考えられた。ギリシア文化では，境界神ヘルメスは境界を越えて往来する使者の神でもあったので，翼や羽は祖霊の宿る鳥の羽であったのが速く飛んでゆくための補助的手段となってしまった。

鈴木牧之編撰，京山人百樹刪定『北越雪譜』（岡田武松校訂，岩波文庫，1978年〈1936年〉，別に文庫特装版，1982年もある）二編巻之二，斎の神祭事にいう。正月15日に斎の神の祭り，いわゆる左義長がある。宮中でも正月15日，清涼殿の庭で青竹を焼き正月の書き初めを焼いて天に奉る。18日にも竹を飾り扇を結びつけて庭で焼いて祝う。民間でも15日，直径3間，高さ6～7尺の円い壇を雪でつくり2か所に階段をつける。世間ではこれを城という。城の真中に杉の生ま木を立てて柱とし，正月飾りなどなにくれとなく柱に結びつけ又は積み上げて，しめ縄でその上を結んで蓑のようにし，かやを差し込んで形をつくる。頂上に大根型のしめ縄の左右に開いた扇をつけて飛鳥の形をつくりつける。そのほか，おんべ（御幣の訛り）というものをつくる。これは白紙と色紙を数百枚合わせ細い幣束のように切り先端は扇の地紙の形に切る。この細い紙を数千集めて青竹に吊し戸口に立て15日に左義長の場所にもっていって焼き捨てる（242－3頁）。

正月15日に立てる柱の頂上に扇型の鳥が止まるのはカドゥケウス柱と同じである。正月15日に五色の色紙のテープを鳥形の付いた青竹の頂上から垂ら

し，それを杉の生ま木の柱と共に焼く。カドゥケウスには２匹の蛇が巻きつくが，日本の小正月の杉と青竹の２本の柱はこれに対応するものである。杉の生ま木の上に巻きつけるしめ縄は蛇を表わした。杉も竹もトーテムポールなのである。扇あるいは団扇（うちわ）は鳥，翼，羽を象徴する。モンゴルのゲルの天窓と地上をつなぐ八角柱は天柱つまりヘルメスの柱で，柱の頂上の羽型あるいは扇型の飾りは鳥の象徴である。ヘルメスの杖カドゥケウスに巻きついた２匹の蛇がつくる８の字は扇，翼，鳥を表わし，その上に付いた拡げた翼と共に元は２匹の鳥であったことが分かる。２匹の蛇自身も２つの祖霊を象徴した。朝鮮文化では，村の入り口に立った境界柱は，人面を付けた天下大将軍像と地下女将軍像とその傍に立つ木製の鳥が止まった鳥杆（長生）である。朝鮮の場合，男女の将軍像の別のほか長生と将軍像の別があり，二重構造を成している。朝鮮の境界神である男女の将軍像や長生には蛇の表象を見付けることはむずかしいが，日本の左義長の柱の場合，杉柱には前述したようにしめ縄が巻きつき，入口に立てた五色の紙テープを垂らした青竹の頂上には大根型しめ縄つまり現今正月飾りとして戸口に飾る片方が太く片方が細いしめ縄が付けられ，その左右に扇で飛鳥がつくられる。蛇も鳥も祖先であり，ヘルメスのカドゥケウスと同じ構造をとっている。正月15日の杉の木も青竹もトーテムポールである。入り口に立てる青竹には無数の色紙の帯を垂らすが，５月の幟（のぼり）と同じあつかいをする。

モンゴルのゲルの天窓の枠を支える78本の輻は天柱の先端から垂れ下がる無数の色紙の細い帯に相当する。紙が出現する前は藁で編んだ紐であったにちがいない。それ以前は祖先獣（トーテム）の皮を細く切ったテープが使用されたであろう。ある氏族や部族が複数のトーテムをもつ場合，同じ数のテープがつくられた。アフリカの部族やスペインのキリスト教徒の祭りでは，大蛇の首を紐で結え棒の先端から垂らしたものが用いられ行列の先頭をゆく。『旧約聖書』「出エジプト記」によると，モーセの兄のアアロンの杖は地上に投げると蛇になった（7.8 －10）。アアロンはエジプトで500年間奴隷の苦しみを味わった同胞をイスラエルに連れ帰るとき，黄金の小牛をつくってそれ

を棒の先端に置き，行列の先頭に立てて進んだ。厳格な一神教が確立するユダヤ教の初期段階ではトーテム信仰の残滓が見られた。アアロンの杖はギリシア・ローマ神話のヘルメスの杖カドゥケウスと同じものである。アアロンの杖には鳥の翼は付いていないが，小牛が別の棒に付いている。

英国の五月祭メイ・デイに立てられる５月１日の五月柱メイ・ポールのうち最大のものはバリック・イン・エルメットにある高さ86フィートの五月柱である。五月柱は２本のカラマツを継ぎ足してつくられ，約15年おきに取り換えられる。その間３年目ごとに古くなった柱を白地に赤と青で螺旋状に塗り直す。柱頭には狐型の風見が付く（チャールズ・カイトリー『イギリス祭事・民俗事典』澁谷勉訳，大修館書店，1992年，247頁）。同書にはヴィクトリア朝時代の古き英国を再現した五月祭の風景画がある。この中に，ピューリタンが嫌悪した忌まわしい五月柱に巻きついた大蛇の偶像が田園の素朴な楽しみの輪の中心に据えられている（246頁）。五月柱が２本の柱を継ぎ足してできているというのは注目に値する。これは高さ25メートルの五月柱ばかりでなく，５～６メートルのものにも当てはまる。２本の柱は雄柱と雌柱を象徴する。法隆寺五重塔の心柱は20メートルほどあるが，２本の八角柱が継ぎ足されたものである。他の塔の心柱にもいえると思う。五月柱は生ま木のものもあるが，材木になったものは色を塗った。それは白，赤，青の３色が螺旋状に上ってゆくものである。上記ヴィクトリア朝期の画では，材木の五月柱に蔓や草や藁を綯ってつくった大蛇が柱の頂上まで巻きついている。柱の先端には風見も何もない。五月柱に塗った三色の螺旋文様は蛇を表わす。バリック・イン・エルメットの五月柱の柱頭には狐が付いている。狐はこの村の祖先獣と見られた時代があったのであろう。風見には普通，鶏が付くが，他の五月柱の柱頭にはこれが付く可能性はある。その場合は五月柱は鳥杆と同じものとなる。

五月祭は現代英国でも行われる。広場や小学校の校庭に柱を立て，数種類の色のテープ何十本かを柱頭から垂らす。若い娘が地上に垂れたテープの端を持ち，乱れないで柱の周りを回る。それぞれのテープが柱に巻きつくと美

しい縞のある蛇になる。巻きついたテープを解くときは，逆の方向に乱れることなく回る。五月柱は，生ま木を用いるときは大枝小枝を切り樹頂には緑を残す。鳥や動物を樹頂に止まらせる記憶はないようである。伊勢神宮の床下には心(しん)の御柱(みはしら)がある。御柱の半分は地中に埋め，半分は地上に立てる。この御柱は内宮と外宮の正殿の床下にあり五色の布を巻きつけ榊で覆い，その周りに皿状の土器800枚を積み重ねてある（松前健「皇大神宮・豊受大神宮」谷川健一編『日本の神々』６，白水社，1986年，18－９頁)。御柱は20年目の遷宮ごとに新しくする。五月柱は15年ごとに新しいものと取り換える。御柱が立つ土器の山は塚を意味する。五色の布を巻いた柱は蛇を表わし五月柱と同じものなのである。心の御柱は荒木田氏や度会(わたらい)氏の祖霊を祭る土饅頭に立てた柱とそれに巻きついた蛇が起源であったと思われる。

モンゴル高原を走るとき，緩やかな起伏のある道路の高みに達すると道端にオボと呼ばれる石積み（ケルン）がある。オボには種々ある。四角い壇を大小２つ重ねその上に石積みをつくり，石積みに柱を立て，柱の先端から数本の綱を四方に張り，その綱にさまざまな色布を垂げたものがある。最大径20～30センチの割れ石から10センチほどの割れ石を１メートル50センチぐらいの円錐に積み上げ，頂上に棒を立て青い布あるいは青いビニール布を垂らしたものが多い。朝夕の一定の時刻にどこからかモンゴル仏教僧が数人の信者を連れてオボの周りを廻り礼拝している。この種のケルンは中央アジアからイランを経てヨーロッパに至るまで見られるもので，五月柱は柱の部分が巨大化したものである。西の五月柱と東の心の御柱は同じものである。新年に５～６メートルの柱の先端に取り付けた球体の宝物を奪い合う競技がアフガニスタンにある。これは柱頭につけられたかつての祖先獣のしるしを手に入れ，新年に再生する儀礼であった。柱頭から垂れる何本かの色布はトーテムの皮を割いたものが始めであった。あるいは蛇そのものであった。地下に埋めた柱の下部を地中に固定するための盛り土や礫の山はかつての墳墓の名残りで石積みを破って出現する祖先の霊魂の化身が蛇であった。モンゴルのゲルの天窓と地上を結ぶ，先端に翼の象徴のついた２本ないし４本の柱は八

角柱で，昔は聖なる感覚をもっていたことは上述した通りである。天窓の枠から放射する78本の輻が五月柱に垂れ下がる無数の五色の布の細切れに相当することは前述した。それはトーテムの皮を細く切って垂らしたもので，塚を破って出てくる祖先の化身である蛇でもあった。

蛇はゲルの天窓からうねった形で放射する輻に留めて地上に向かう綱で表象される。この綱は八角柱に巻きつけてない。綱は2本ないし3本の綱を縒ってつくられる。綱の中には黒い綱と白い綱を縒ったものもある。生と死を象徴する2匹の蛇を表わしたのであろう。カドゥケウスの杖に巻きついた2匹の蛇を想起させる。イランでは伝統的な出産は，ベッドあるいは床に敷いた布団の周りを黒白のひもで縒ったひもで囲む。産室の四方の壁にこのひもを打ちつけて固定する場合もある。産婦の枕もとに刃物を置きろうそくを立て火を灯す。産室では香を焚いて出産に備える（M．カティーラーイー『レンガからレンガへ』テヘラン，1969年，30頁）。日本人から見ると葬式で死体を安置したような観がある。葬式も出産も境界の儀礼であるので同じことをする。黒ひもと白ひもの縒りひもは蛇を表わすと同時にへその緒をも表わした。山伏の峰入りは死の世界である山に入って山上の母胎を象徴する宿に入り再生するための儀礼である。宿が古くは自然の洞穴であった時代もある。母胎では天井から赤と白の2本のひも，あるいはそれを縒ったひもが垂れ，その下で再生儀礼が行われる。山伏はへその緒と呼んでいるので赤ん坊として母胎から生まれ出ると信じられている。へその緒によって母胎を通じて天（の創造主）とつながっていると考えている。山伏は峰入りのとき腰に赤あるいは黄のひもを巻く。螺緒（かいのお）というもので修験道の教義で2本のひもの意義が説かれるが，山伏が峰入りするときに持つ自分のへその緒である。C．ブラッカーは1963年8月友人の学者と山伏らと羽黒山に登った。その週に修行が行われる荒沢寺に入った。修行のために準備が行われたが，本堂の天井から白と赤の長い房を垂らした。それによって胎児が母胎と結ばれている静脈と動脈を表わしている（『あずさ弓』秋山さと子訳，岩波書店，1979年，215頁）。

インドネシアのフローレス島の事例を見てみよう。フローレス島はバリ島の東にある島で，島の中央部に15万人ほどのリオ族が住む。山口昌男『文化人類学への招待』（岩波新書，1982年）にいう。リオ族の家は船のイメージをもっている。家の内陣の天井から１本の太い綱が吊されて，先に鹿の角か円盤がさがっている。この綱は彼らはへその緒と呼ぶ。下にさがった角や円盤はへそと呼ばれる（117頁）。妊婦は船そのものを示すような家の中で船の座席と同じような台に座って出産する。生まれると子供をへその緒と呼ばれる綱の下に置く。人がもう息を引き取るというときにも，同じ位置に体を戻して寝かせる。こうすることによって死者が母胎に帰ってゆくことを示す（119頁）。リオ族の家にあるへその緒は，修験道の山の宿にあるへその緒と同じものである。修験道の山は死の世界でありそこにあるへその緒の下に座ることは死体としてへその緒の下に横たわることであり，さらに再生してへその緒の下に横たわる嬰児でもある。リオ族の家にはもう１つ綱が下がっていて，その先に籠がついており籠の中に石が１つ入っている。石は家の持ち主が道を歩いているときに見つけたもので，それを家に持ち帰りお守りとして籠に入れる（116頁）。羽黒山の宿の天井から２本のひもが垂らしてあるのを見た。その下で山伏の再生儀礼が行われる。

上に見てきたへその緒は２本を基調とする。静脈と動脈の２本がこの基調を表わす。しかしへその緒の中を走る血管は，出産時には動脈２本，静脈１本である。それはへその緒の切り口に表われているので，昔から人びとが知っていた事実である。４～５か月の胎児のへその緒の中には動脈２本，静脈２本が走っている。そのうち静脈１本が退化して出産のときは血管が３本になる。メッカにあるイスラム教徒の聖所であるカアバ神殿は，現在の構造は次のようになっている。神殿の床は７フィートの高さがあるので，神殿に入るにはタラップを入り口に移動させて入る。床の真ん中に穴が空いていてマホメットがイスラムを樹立する以前は異教時代の神の偶像が中に安置してあった。床には11メートルほどの３本の柱が立っていて平たい天井（屋根）を支えている。天井の片隅に１メートル四方の上げ蓋があり，蓋を上げると真っ

暗な神殿の内部に天空の光が入り，天と地とが通じるようになる。床の上から上げ蓋の下まで梯子がかかっていて，人は梯子を上って神殿の屋根の上に出て四方を眺めることができる。神殿の中の 3 本の柱はへその緒と呼ばれる。へその緒は天である天井と地上を結ぶ。2 メートルほどの高さの床は大地から突起したへそで，床の真ん中の穴はへその穴である。へその緒を通じて神の子が誕生するが，神の子とはフバル神と呼ばれた穴の中に安置された神の偶像であった。この神殿がイスラムによって占有されたとき，偶像崇拝を排したマホメットによって偶像は破壊された。イスラム以前のカアバでは大地のへそである地上に突出したへそ，へその穴，へその緒，誕生した神の子のあらゆる要素が備わっていた。ここではへその緒は 3 本の血管を表わす柱によって表象された。

五月柱が 2 本の柱をつないでつくられることは前述した。しかし，柱に色が塗られるとき，柱を白地にし，その上に赤と青の帯を螺旋状に塗る。五月柱の伝承には，柱は 1 本であるが 2 本でできていることと，白・赤・青の 3 色の段だら文様の 2 つがあることが分かる。赤と青は動脈と静脈を表わすのは分かる。地の色として塗った白は，へその緒を切断したときに目に入る 2 本の赤い血管と 1 本の青い血管のうちの赤い血管の 1 つではないかと思う。五月柱の本体に見られる赤・青・白の 3 色の段だら文様は理髪店の赤・青・白の段だら棒の看板を想起させる。理髪店の看板の場合，開業しているしるしとして電気が入っていて三色模様がぐるぐる回っている。看板の起源として，ヨーロッパでは床屋は昔外科医でもあったので患者の静脈から瀉血した名残りである。より古くは白と赤の 2 色であったと説明する。白は白衣で赤は血液であるという。理髪店の看板は血管かも知れない。白は血管ではなく白い手術着であるかも知れない。別の説では患者は柱にもたれて放血した。柱を使わないときは入り口に柱を立て，血のついた包帯を巻いた。これが床屋の看板になったという。いずれも床屋談義ふうである程度説得力をもつが別の見方も可能である。

福島一浩「仙人の誕生――全真教と呂洞賓信仰を中心として」にいう。中国の商

工業者にはそれぞれの守護神がいる。薬業の神農，役者の玄宗，茶業の陸羽がこれである。仙人呂洞賓は，明の大祖により断罪されかけた床屋を救ったとの伝承から，今でも理髪業者の守護神になっている。図像的には呂洞賓の象徴は背中にさした剣である。この剣は彼を愛した白蛇の化身であるとする戯曲もある（『象徴図像研究』9，象徴図像研究会，1995年，46，49頁）。床屋の業神は蛇であるという伝承に注目すべきであろう。床屋は古来店を構えず道端で開業するのが東西にわたって見られる。散髪した毛髪は1か所に集めて焼却する。その臭いを嗅ぎつけて蛇が寄ってくるという俗信がある。床屋の守護神は蛇であるという俗信はここから発したのであろう。英国の五月柱の本体に塗られた白・赤・青の段だら文様は血管の表象であるほかに蛇でもあったと考えることができる。外科医でもあった道端の床屋は客集めをするために無毒の蛇を使った。蛇に腕を咬ませて傷口に塗る軟膏類を売ったのであろう。血管と蛇が同じように扱われるのは両方とも生命力の根元であるという思想に由来するからであろう。血は祖先から受け継ぐものであるし，蛇は祖先そのもので，冬は祖先が埋葬された墓穴の空間に副葬品と共に冬眠する。春になって塚の穴から地上に出てくる蛇は，年に数回脱皮してその度ごとに艶やかに再生するので，血液と同じように祖先から伝わる生命と認識された。

京都市太秦（うずまさ）の広隆寺の旧境内にある木島坐天照御魂（このしまにますあまてるみたま）神社の境内の西北隅に四季水が湧き出る元糺（もとただす）の池がある。池は径2メートルほどの小さいもので，池の真ん中に礫を積み上げた円錐形があり頂上に棒を立て棒の先端から四手が垂れている。円錐の周りに八角形の石柱が3本立っていて三つ鳥居を形成する。3本の石柱は3本の笠木と3本の貫（ぬき）で連結され，笠木と貫の間には額が付いているので3つの鳥居が三角形を成して立っている観を呈する。太秦は渡来人秦氏の本拠地で，彼らが奉持した弥勒を祭ったのが広隆寺である。三つ鳥居は太陽崇拝と深い関係をもっていた（大和岩雄「木島坐天照御魂神社」谷川健一編『日本の神々』5，白水社，1986年，109－17頁）。3本の柱の頂上を結ぶ笠木と貫は三角の平面を形成する。この平面は屋根（天井）に

当たる部分であるが天を遮るものは何もない。三つ鳥居の場は太陽神ミトラ～ミフラク～弥勒を祭る空間であった。3本の柱に周まれた立体空間とその基底にある礫でできた円錐は，アラビアのメッカにあるカアバ神殿と同じ構造をなす。メッカのカアバはイスラム暦の12月8日から12日に至る5日間の大祭の期間だけ神殿を覆うキスワという裏地の白い黒い布を巻き上げて石の家を出現させる。神殿の天井にある四角い上げ蓋もこの期間だけ上げて天と通じるようにする。2メートルほどの高さの床は三つ鳥居の基底にある円錐に当たる。ミトラ～弥勒は太陽神で，それは父なる神である天神（太陽神）アフラ・マズダーと水神アナーヒターの子で，ギリシア神話の天神ゼウスの子太陽神アポロンに相当し，再生する幼な児を表わした。このような祭祀空間は天と地の間の障害物を取り除き天の子が地上に降下できるようにする。そうすることによって宇宙の秩序が保たれると考えられた。

前述したように古代中国には亡国の社ということばがあった。『礼記』郊特牲に，天子の大社は社殿に屋根を設けないで霜・露・風・雨がじかに降りかかるようにしてあるが，こうして天と地との気がよく通じ合うように計ったのである。それゆえ，亡国の社には屋根を設けて天の陽の気をじかに受けないようにしてある（中，竹内照夫著，明治書院，1977年，395頁）。モンゴルのゲルの天窓が空いているのは天地の間に秩序が保たれるようにするためである。神殿や拝殿の屋根に穴が空いているのも同じである。カアバ神殿は祭りのときだけ天井の上げ蓋を上げて天と地をつなぐ。イスラム教のモスクや伊勢神宮には空の下で行う祭りがあるが，長い時間の経過と共にその意味が少しずつ変遷していった。ゾロアスター教の葬場である沈黙の塔は死体を曝す円形の風葬の場を囲む高い壁はあるが葬場を覆う天井（屋根）に類するものはない。死体を曝す床は地上1～2メートルの高さに土砂を盛り真ん中に穴がある構造で，大地のへそというものである。メッカのカアバ神殿の四角い床は高さ2メートルほどあり真ん中に穴がある。韓国慶州にある新羅時代の瞻星台は円い床が地上数メートルの高さにあり真ん中に鏡池と呼ばれる凹みがある。瞻星台は屋根も天井もなく天と通じている。京都御所の清涼殿

にある石灰の壇は四角い土壇が御殿の床の高さまで築いてあり，壇の真ん中に灰壷という穴があり，中に灰や燃えさしが残っている。清涼殿の東南にある石灰の壇のある部屋には天井があるのでその点では古い伝統はとぎれた観がある。石灰の壇には 3 の表象や柱の表象はないが木島神社の三つ鳥居にはそれが見られる。 3 本柱はメッカのカアバ神殿にもある。太秦の木島坐天照御魂神社の元糺の池と、池の中にある円錐形の礫の堆積とその上に立てた棒と四手の複合は、分析すると以下のような構造をもっていることになる。

アラビアのメッカにあるカアバ神殿は、現在は聖モスクの四角い境内の中にある。その位置は涸れ川の川床で、この川床は前後の川床と較べるとより低くなっている。信仰上はこの位置は天にもっとも近いとされる。何十年に１回の豪雨があると涸れ川は氾濫し境内を貫流する。四角い境内は雨が止んだあとも水が引かず、石の神殿は四角い海に浮いたノアの方舟の観を呈する。元糺の池はカアバ神殿が浮く池（海）に相当する。三つ鳥居の 3 本の柱はカアバ神殿の床の上に立つへその緒と呼ばれる 3 本の柱と同じものである。池の中の礫の山はユーラシアに広く見られるケルンでモンゴルのオボに相当する。ケルン、オボには柱を立てその頂上から布を垂らすが立った柱は 1 本である。前述したように 1 本の柱が 2 本の柱を継いでできていたり、白・赤・青 3 本の柱を表象したりするので、オボの柱は三つ鳥居の 3 本の柱と同類である。オボの柱の先端から垂らす青い布あるいは青いビニール布（中央アジア以西では白い布が一般である）は元糺の池では白紙の四手になっている。カアバ神殿では神殿を覆うキスワと呼ばれる白い裏地のついた黒い布がこれにあたる。モンゴルのゲルでは、天窓と 2 本の柱と、柱の根もとにつくったストーブ以前の礫を敷いた炉と、布を縒った綱が見られる。

天窓を開けたゲル、屋根（天井）のない神殿、床の中央にある炉あるいは（炉）穴、その周囲に立つ柱の複合が 1 つの単位になっている。何十年振りかに大草原に降り積った雪が春先きに一斉に融け始めて大洪水になり神殿やゲルが水浸しになったとき、ノアの大洪水と方舟が出現する。現在のゲルは円形であるが、古くは他民族のテントと同じように四角いものもあったであ

ろう。

カアバ神殿の天窓、ゲルの天窓、聖所の屋根に穿った穴あるいは屋根と天空が同一化したものなど文化によって表われ方は様々である。これらの開いた穴の下にある床で天と地の結婚が行われ、そこで誕生と死が生起した。メッカのカアバ神殿では、異教時代、イェメンから参詣に来た男女が神殿内で交会したため神罰として男女の石像に変えられたという伝説が伝えられている。異教時代すでに神殿内での天と地の交会がタブー視されていたことが分かる。異教時代、メッカのカアバ神殿は境界そのものであったので男女の石の道祖神像がありその由来譚ができたのであろう。神域内での交会はタブー視され禁止される以前は神聖視された行為であった。このような神聖な場での交会では天父地母の表象が一般であるが、文化によっては天母地父の表象もある。モンゴルのゲルでの生活を見ると、彼らは始祖と同じように天窓の下、炉の傍で誕生し、天窓の下，炉の傍で死んでいった。天井から垂れる綱は，昔は炉端で出産する女性は日本を始め他の多くの国々の民俗誌にも見られるように，これを握って力綱として力んで出産したのであろう。死ぬときはこの綱を善の綱として手にしてあの世に導かれていったのであろう。綱は 2 本ないし 3 本の綱（ひも）を縒ってつくられる。それは塚を破って柱を這い上がる祖先の霊魂の化身である蛇である。祖霊は新生児の中に入って祖先の不死と永生を実現した。死者は，一方，祖先の化身である蛇――善の綱として表わされる――に手をとられてあの世に導かれる。綱はゲルの室内から天窓の開け閉めをするためのものではない。

炉やストーブを挟んで立つ 2 本の八角柱の周辺はいまだにある種の禁忌を温存している。八角柱はただの四角柱や円柱とは異なり聖性をもつ柱である。モンゴルの遊牧民は移動するので，定住する民族の家屋とはちがい聖性もゲルを張った場所ごとに移動した。定住者の家屋では，入り口の敷居の下に幼児の死体を埋葬する風習が見られるが，ゲルには恐らくこの風習はないであろう。敷居を祭壇と考えると，死体は家の者が屋外の神に供えた犠牲であったと考えられる。モンゴルの場合，ゲルの完成のとき入り口で羊を解体する

のがこれに当たると考えられる。定住者の家屋のかまどや炉にはそれを築くとき祖先の死体をその下に埋めたという伝説がある。ゲルの場合，炉やストーブの周辺に禁忌があるが定住者の住居がもつ伝説はない。さらに定住者の住居の居間の床下に死者を埋葬する事例は，考古学的にも文献的にも伝承的にも見られる。家屋を新築したとき，居間の床の中央を四方より少し低くつくる伝統をもつ国々がある。地上から突出した大地のへその中央に凹みの穴がある構造と同じものであるが，現代建築では死体を埋葬したりはしない。居間の下に埋葬した場合，中央部が凹んでくる事実が居間の床の形式になったのであろう。イスラムの預言者マホメットはメディナで没した。妻アーイシャは夫マホメットの遺体を居間の床の下に埋め余生を送った。遊牧生活では移動するたびにテントを設立しなければならないので，炉を築くとき人間を供犠するのではなく羊を供犠した。入り口で供犠したと考えられるが，大昔は炉やかまどが入り口にあったからだと考えられる。入り口でパンを焼くのは古いかまどの位置を暗示する。厳寒の冬などテントの内部でパンを焼いたり肉を焼いたりする方が暖くて快適であるが発生時は必ずしもそうではなかったと思う。炉やかまどの位置が室内に移るのは新しい現象であろう。

平成14年（2002）8月11日から19日までモンゴル国の首都ウランバートルに行き，12日と13日に行われた第5回国際民俗学会に名古屋大学の櫻井龍彦教授らと参加し各自が研究発表をした。その間数日をゲルの中で生活し，毎日円い天窓と八角柱とその下にあるストーブ（炉）と天窓から四方に放射した輻に留めてある蛇形の綱を見て上記の一文をまとめた次第である。

Structure of the Mongolian *Gher*

Eiichi IMOTO

The features which constitute the structure of the Mongolian *gher* are: a round skylight consisting of a dual framework with eight spokes; two or four octagonal pillars with wing-shaped ornaments on top, which connect the framework to the ground, supporting the ceiling of the *gher*; and a stove or hearth between the pillars.

We can notice various aspects common to other ancient civilizations in this structure. First, skylights are seen in the ceilings or upper part of the walls of Christian, Islamic, and also Buddhist temples. The skylight represents a gateway between heaven and earth. The octagonal shape is another sacred symbolism of the ancient world.

A pillar with a bird on top, forming a primeval totem pole, is also seen all over the world. In the *gher*, there is a stove or hearth between the pillars, and beneath it an ancestor would be buried at the time of the construction of the hearth.

The *gher* is the embodiment of the spirit of the Mongol people.